鳳凰

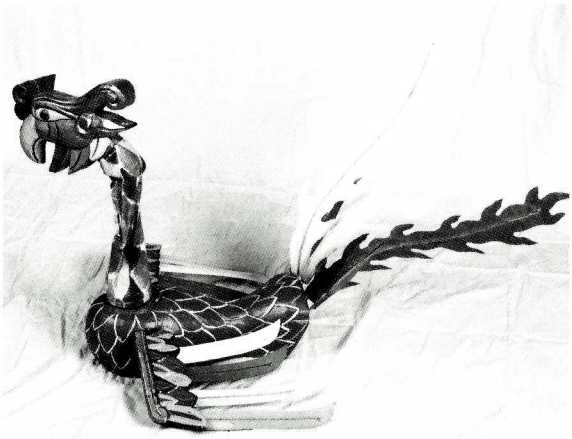
水上操り人形（不死鳥）（標本番号H151620、高さ／51cm　幅／49cm　奥行／84cm）

樫永 真佐夫（かしなが まさお）
本館民族社会研究部

幾多の河川や水路と、降りしきる雨の水で潤いあふれるベトナム北部の紅河デルタには、水上人形劇を、数百年以上にわたって伝えている村がある。池のなかに設置された劇場では、すだれの向こう側にいる人形使いたちが、それぞれ二本の長い棒で人形を操る。豊穣祈願とも結びついて上演される。写真の人形は、劇の役者である。

鳳凰の舞は、ベトナム戦争中に指導層が庶民の娯楽のために建てたハノイの劇場で、よく知られた演目である。二〇世紀初頭まで続いた王朝時代、鳳凰は太平の象徴であった。子宝に恵まれた鳳（オス）と凰（メス）の優雅な舞い姿は、平和を願う人びとの心に響いたに違いない。

鳳凰の姿は、前は麟（りん）、後はシカ、くびはヘビ、背はカメ、尾はサカナ、あごはツバメ、くちばしはニワトリに似て、五色絢爛（けんらん）という。ちょっと想像しにくいが、中華文化圏各地では古代からさまざまにイメージされてきた。身近なところだと一万円札にもある。

ベトナムでもこの瑞鳥（ずいちょう）は、古くから陶磁器、屋根飾り、祭壇の装飾などに用いられてきた。中国にならって竜を王権のシンボルとしてきたが、王朝末期には鳳をシンボルとする皇帝もあらわれた。竜と鳳凰は装飾で対になっていることが多い。どうも鳳凰は、竜に対して脇役であることが多いようである。

インドシナ盆地民の黒タイは、竜を水の精、ツバメを地の精とみなし、くにの安定のために両精をまつっていた。このツバメは鳳凰と同義かもしれない。鳳凰は朱雀（南）の方角を司り火の精とされるが、水の対立項という点では、地と火は同列である。また、男性器のことを竜とよび、女性器をツバメとよぶ。そういえば、手塚マンガの「火の鳥」では母性的側面が強い。鳳凰は、いのちや再生産のシンボルでもある。